

[学術論文]

日本における伝承遊び実施状況と保育者の認識

The Knowledge and Use of “Traditional Games” by Nursery Teachers in Japan

穉丸武臣・丹羽 孝（名古屋市立大学）

勅使千鶴（日本福祉大学）

Takeomi AKIMARU, Takashi NIWA, Chizu TESHII

Studies in Humanities and Cultures

No. 7

名古屋市立大学大学院人間文化研究科『人間文化研究』抜刷 7号
2007年6月

GRADUATE SCHOOL OF HUMANITIES AND SOCIAL SCIENCES

NAGOYA CITY UNIVERSITY

NAGOYA JAPAN

JUNE 2007

[学術論文]

日本における伝承遊び実施状況と保育者の認識

穂丸武臣・丹羽 孝 (名古屋市立大学)

勅使千鶴 (日本福祉大学)

要旨 本研究は幼稚園と保育所の保育教材として導入されている「伝承遊び」の実施状況と保育者の認識について、郵送法によるアンケートの全国調査を分析したものである。

調査対象は全都道府県の都市部とそれ以外の市町村から多段階抽出法によって幼稚園568カ園、保育所590カ所、合計1158カ所を抽出した。回収数は651カ所、回収率は約56%であった。

その結果、日本ではほぼ全て(99%)の幼稚園・保育所において伝承遊びが実施されており、保育教材として活用されていた。保育活動への伝承遊び導入の理由は、①子どもの成長や発達に有効であること、②日本の遊び文化の継承のためとするものであった。しかし、伝承遊びを普及・充実する際の隘路としては、幼稚園教諭と保育士(以後 保育者)自身の伝承遊びに対する力量不足を認識しており、研修の必要を認める結果であった。

キーワード : 保育所、幼稚園、伝承遊び、保育者の認識、全国調査

I 緒言

文化史の視点から遊びを論じたのはヨハン・ホイジンガ(1973)であり、さらにそれを社会学の視座から発展させたのはロジェ・カイヨワ(1973)であった。カイヨワは人間の遊びの特徴を次の4つのカテゴリーに分類した。①アゴン(競争):すべて競争という一連の遊び、②アレア(偶然):遊戯者の力の及ばない偶然に支配された遊び、③ミミクリ(模倣):自分が架空の人物になりそれに相応して行動する遊び、④イリンスク(眩惑):一時的に知覚の安定を破壊しパニックの状態に陥れようとする遊びである。さらに、遊びの定義として、①自由な活動、②分離した活動、③不確な活動、④非生産的活動、⑤ルールある活動、⑥虚構的活動等をあげている。

ホイジンガやカイヨワの研究は、人間の生活のなかでの遊びの位置づけをしていることから、幼児の遊びとは何かを明らかにする際の重要な知見となった。

幼稚園や保育所における遊びの位置づけは、幼児教育・保育の羅針盤といわれる幼稚園教育要

領（1989年）と保育所保育指針（1990年）の改訂によって大きく転換した。そこに示された幼稚園教育の基本的な特徴は①幼稚園教育は環境を通して行うものであること。②幼児の主体的な活動を促し幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること。③幼稚園では遊びを通して、幼稚園教育のねらいが達成されるようにすること。④幼児一人一人の特性に応じて、発達の課題に即した指導を行うようにすることである。2000年に行われた改訂においても、前述の基本的な方針は引き継がれている。保育所保育指針は3歳以上の子どもについては、幼稚園教育要領と基本的に同じ内容である。

これを要約すれば、保育者は子どもたちの成長に最適な環境を用意し、子ども達に豊かな遊びを体験させ、心身の発達を促すことが重要であることを意味している。従って、幼児の教育・保育における遊びの教材研究は重要な課題といえる。

遊びの本質は自発的な動機づけによる、楽しさや面白さの追求である。その行動が子どもの意欲を育て、自己の行動や態度を形成する。遊びの楽しさは、本能的な感覚レベルから課題解決能力の獲得まで階層構造的であり、個人の努力や友だち・仲間との協同によって質的発達が図られる。

本研究の対象となった伝承遊びは、半澤（1980）が示した奈良・平安時代（1190年代）の「双六」や「独楽」などの歴史的に古く、そして現在まで継承されているようなものから、戦後の路地裏遊びとして子どもたちの間で伝えられて来た比較的、新しい遊びも含まれている。伝承遊びは子どもたちにとっておもしろく、楽しいものであり、なおかつ、子どもの成長や発達に役立つものが過去から現在まで継承されているものと思われる。

幼児期の遊びによる発達や指導に関する文献には柴谷（1977）、城丸（1981）、高橋（1984）、守屋（1990）、勅使（1999）、小川（2001）等がある。また、伝承遊びの解説や遊び方等の文献としては、増田靖弘編（1989）、芸術教育研究所（1986）、半澤（1980）、笹間（2005）、韓 丘庸（2000）など、多数の先行研究がある。

しかし、伝承遊びを対象とした幼稚園・保育所の全国調査は皆無に等しい。この度、韓国の「伝統遊び」研究者と共同で両国の伝承遊びの実態を把握し、保育教材としての「伝承遊び」の価値を再認識し、その普及を計ることを目的として、全国の幼稚園・保育園で実施されている伝承遊びの実態および保育者の伝承遊びに関する認識についてアンケート調査を実施した。ここでは日本に関する調査結果と課題を報告する。

II 研究方法

1. 研究対象

本研究の調査対象園の選択にあたっては、『全国学校総覧 2004』と『全国社会福祉施設等名簿』の平成16年発行版を用いて国立幼稚園は全園、公私立の幼稚園と保育所は各県庁所在地

とそれ以外の市町村から多段階抽出法により、幼稚園は568ヵ所、保育所は590ヵ所、合計1158ヵ所を抽出した。全体の回収率は約56%で、分析の対象はその他・園種不明を含めて651園であった。

2. 質問紙の配布と回収について。

質問紙の配布と回収は共に郵送によって行った。記入に当たってはアンケートの性格上、年長組の担当の保育者またはそれに準ずる者に、園長を通して依頼した。

3. 調査時期

調査用紙の発送は2004年11月10日、回収締め切りは2005年1月10日であった。

4. アンケート質問項目の内容

アンケート調査の質問内容は保育者が現在実施している伝承遊びの現況と、保育者の意識や認識に関する2部から構成した。

5. 伝承遊び種目について

伝承遊びは日本と韓国共通と思われる遊びを両国の共同研究者で検討し32種目、それ以外に日本の研究者が選択したものは29種目であった。

6. 伝承遊び調査記入方法について

伝承遊び実施状況の記入は、③実施、②承知、①不承知の選択肢から該当するものに○をつけた。③実施は、過去3年間に園で幼児と一緒に伝承遊びを実施したことがある。②承知は、その伝承遊びの名前や遊びの方法は知っているが過去3年間実施していない。①不承知は、遊びの名前や内容を知らないし、実施したことがないものである。

7. 分析の視点

分析は単純集計とフェースシート項目の地域別、年代別の特徴をクロス集計し、差の検定は χ^2 によって行い、有意水準を $p < 0.05$ とした。

Ⅲ 調査結果

1. フェースシートの質問項目について

1) 調査対象地域について

調査対象園の各都道府県は8地域に分類された、その地域別度数と全体に占める比率について表1-1に示した。関東地区が約17%で最も多く、ついで北海道・東北地域、九州・沖縄地区で四国と中国地域が10%以下で最も少なかった。回収状況からほぼ全国の幼稚園・保育所を網羅しているといえよう。

調査対象地	度数	%	累積度数	累積%
北海道・東北地域	100	15.53	100	15.53
関東地域	112	17.39	212	32.69
甲信越・北陸地域	72	11.18	284	48.87
東海地域	78	12.11	362	55.98
近畿地域	80	12.42	442	68.40
四国地域	42	6.52	484	74.92
中国地域	60	9.32	544	84.24
九州・沖縄地域	100	15.53	644	100.00

欠損値の度数 = 7

2) 調査対象の設立形態

調査対象園の設立形態は表1-2に示したように、国立幼稚園は全体の約6%、公立幼稚園は約23%、私立幼稚園は約19%、公立保育園は約25%、私立保育園は約25%、その他は約2%であった。その他の中には国立大学附属の幼稚園が独立法人化したため、分類上、その他として記入されていた。また、調査時点で多くの市町村合併が生じていて、民営とも公立ともいえない位置の園等が含まれていた。

表1-2 対象園の設立形態

園の形態	度数	%	累積度数	累積%
国立幼稚園	39	6.03	39	6.03
公立幼稚園	146	22.57	185	28.59
私立幼稚園	126	19.47	311	48.07
公立保育園	161	24.88	472	72.95
私立保育園	163	25.19	635	98.15
その他	12	1.85	647	100.00

欠損値の度数=4

3) 調査対象園の地域性について

園の設置環境を示す地域性について表1-3に示した。

園の約67%が住宅地域で最も多く、ついで農村地域、商業地域の順であり、漁村、工業地域は少なかった。

表1-3 設置環境を示す地域性

地域	度数	%	累積度数	累積%
住宅地域	388	66.67	388	66.67
商業地域	60	10.31	448	76.98
工業地域	3	0.52	451	77.49
農村地域	102	17.53	553	95.02
漁村地域	12	2.06	565	97.08
その他	17	2.92	582	100.00

欠損値の度数=69

4) 回答者の年齢について

回答保育者の年齢分布は表1-4に示した。アンケート回答者の年齢分布は45-49歳の年齢群が最も多く、約20%を占めていた。60歳以上及び24歳以下は少なかった。

表1-4 回答者の年齢分布

年齢	度数	%	累積度数	累積%
①20-24歳	28	4.34	28	4.34
②25-29歳	93	14.42	121	18.76
③30-34歳	78	12.09	199	30.85
④35-39歳	66	10.23	265	41.09
⑤40-44歳	94	14.57	359	55.66
⑥45-49歳	128	19.84	487	75.50
⑦50-54歳	97	15.04	584	90.54
⑧55-59歳	47	7.29	631	97.83
⑨60歳以上	14	2.17	645	100.00

欠損値の度数=6

5) 回答保育者の最終学歴について

回答保育者の最終学歴を表1-5に示した。回答者の約70%が短大卒業生であり、四年制大学以上の卒業生は約16%であった。

表1-5 回答者の最終学歴

最終学歴	度数	%	累積度数	累積%
①高等学校卒	16	2.49	16	2.49
②専門学校卒	83	12.91	99	15.40
③短期大学卒	437	67.96	536	83.36
④4年生大学卒	96	14.93	632	98.29
⑤大学院修了	8	1.24	640	99.53
⑥その他	3	0.47	643	100.00

欠損値の度数=8

6) 教育・保育経験年数について

回答者の教育・保育経験年数を表1-6に示した。回答者の教育・保育経験年数で最も多かったのは20年～30年未満で、約35%であった。10年以上の経験者が約90%で、保育経験豊かな保育者の回答といえよう。

表 1-6 教育・保育経験年数

教育・保育	度数	%	累積度数	累積%
①1年未満	3	0.47	3	0.47
②1～5年未満	50	7.75	53	8.22
③5～10年未満	112	17.36	165	25.58
④10～15年未満	97	15.04	262	40.62
⑤15～20年未満	73	11.32	335	51.94
⑥20年～30年未満	225	34.88	560	86.82
⑦30年以上	85	13.18	645	100.00

欠損値の度数=6

7) 保育者の勤務する園の規模について

保育者が勤務する園の規模について、表1-7に示した。園の規模では100～149名が最も多く、約41%であった。60名以下の小規模園は約8%であり、300名以上の大規模園は約2%であった。

表 1-7 保育者の勤務する園の規模

園の規模	度数	%	累積度数	累積%
①30名以下	15	2.33	15	2.33
②30-59名	36	5.58	51	7.91
③60-99名	143	22.17	194	30.08
④100-149名	262	40.62	456	70.70
⑤150-199名	114	17.67	570	88.37
⑥200-299名	61	9.46	631	97.83
⑦300-399名	9	1.40	640	99.22
⑧400-499名	2	0.31	642	99.53
⑨500名以上	3	0.47	645	100.00

欠損値の度数=6

8) 保育者の担当クラスについて

保育者が担当している年齢クラスについて、表1-8に示した。アンケート調査の回答者をできるだけ年長クラスの担当者に求めたため当然、5歳児クラスが最も多く約64%を占めていた。その他の中には園長等、クラスを担当していない回答者もあった。

表 1-8 回答者の担当クラス年齢

年齢クラス	度数	%	累積度数	累積%
①3歳未満クラス	17	2.71	17	2.71
②3歳児クラス	25	3.99	42	6.70
③4歳児クラス	48	7.66	90	14.35
④5歳児クラス	402	64.11	492	78.47
⑤混合クラス	60	9.57	552	88.04
⑥その他	75	11.96	627	100.00

欠損値の度数=24

9) 回答者の性別について

回答者の性別は表1-9に示したように、女性が約96%で、男性は約4%であった。

表 1-9 回答者の性別について

性別	度数	%	累積度数	累積%
①男性	25	3.86	25	3.86
②女性	622	96.14	647	100.00

欠損値の度数=4

2. 伝承遊び実態調査の結果

1) 伝承遊びの実施実態状況について

本調査で選択された伝承遊びは61種目である。伝承遊びの実施率が80%以上を遊びの実施率が非常に高い、50%以上～80%以下をやや高い、50%以下を低いとしてその一覧を表2に示した。

表2 園における伝承遊び実施率

実施率80%以上		実施率80～50%以上		実施率50%以下	
遊び種目名	実施率(%)	遊び種目名	実施率(%)	遊び種目名	実施率(%)
折り紙	99.69	草相撲	79.88	猫とねずみ	45.27
ままごと遊び	99.07	お手玉	77.43	影絵遊び	43.65
カルタとり	98.91	渦巻きじゃんけん	73.80	おはじき	41.58
縄跳び	98.61	影踏み鬼	71.10	ビー玉	40.22
かごめかごめ	98.30	雪投げ合戦	70.50	そり・スケート	39.38
だるまさんが転んだ	96.91	草笛あそび	67.03	お月見	35.87
かくれんぼ	96.75	缶ぼっくり	66.00	ケンケン相撲	30.47
あやとり	96.45	羽根つき	65.07	子とろ子とろ	30.33
追いかけ鬼	96.44	砂取り遊び	64.86	メンコ	25.39
虫取り	96.28	着せ替え人形	64.71	缶蹴り	16.82
花いちもんめ	95.51	盆おどり	63.98	ぞうり隠し・靴隠し	16.56
お人形さんごっこ	95.05	ゴム跳び	61.61	田んぼの田	14.93
あぶくたった	93.65	とうりゃんせ	61.21	靴取り	13.84
こま回し	92.41	風ぐるま	61.05	目かくし鬼	12.87
すごろく遊び	89.95	どんじゃんゲーム	61.02	石蹴り	12.25
ハンカチ落とし	89.91	剣玉	60.78	Sケン	11.47
まりつき	88.85	腕相撲	60.68	地面の陣取り	5.62
尻尾取り	87.79	ちゃんばらごっこ	58.67	字かくし遊び	4.94
たこ揚げ	85.91	竹馬	55.11	どこゆき(町内めぐり)	3.10
おしくらまんじゅう	83.67	ドロケイ	52.40		
相撲ごっこ	82.95				
もちつき	80.19				

伝承遊び全61種目の内、実施率が80%以上は22種目であり、全種目の36%を占めていた。80～50%以上の実施率を示した遊びは20種目で全種目の約33%、50%以下の実施率を示した遊びは、19種目で約31%であった。

園における伝承遊び実施率90%以上の遊びは、「折り紙」、「ままごと遊び」、「カルタとり」、「縄跳び」、「かごめかごめ」、「だるまさんが転んだ」、「かくれんぼ」、「あやとり」、「追いかけ鬼」、「虫取り」、「花いちもんめ」、「お人形さんごっこ」、「あぶくたった」、「こま回し」であった。

実施率が非常に低い伝承遊びは、「どこゆき(町内めぐり)」、「字かくし遊び」、「地面の陣取り」、「Sケン」、「石蹴り」、「目かくし鬼」、「靴取り」、「田んぼの田」、「ぞうり隠し」、「缶蹴り」であった。

実施率の低い伝承遊びの中には、1950年代には路地裏や寺社の境内、原っぱ等で遊ばれていたものが多く含まれていた。

2) 保育中の伝承遊び実施率について

保育の中に伝承遊びを取り入れている比率を表2-1に示した。回答園のうち約99%が保育の中に伝承遊びを取り入れていた。取り入れていないと回答したのはわずか5園で、1%未満であった。

表2-1 伝承遊びを園で取り入れている状況

園での取り入れ状況	度数	%	累積度数	累積%
①取り入れている	642	99.23	642	99.23
②取り入れていない	5	0.77	647	100.00

欠損値の度数 = 4

2-1) 伝承遊びを園で実施するようになった動機について

伝承遊びを園の保育計画に取り入れるようになった動機を図2-1に示した。

園の教育・保育方針によって伝承遊びを導入している比率は過半数を超え、ついで個人的な考えによって保育に取り入れている比率は36%であり、行政官庁などの指導によって取り入れているのは12%であった。

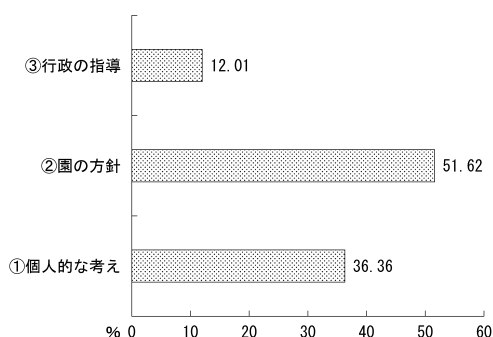


図2-1 伝承遊び導入の動機

3) 伝承遊びを実施する時の参考資料の種類 (複数回答)

園で伝承遊びを実施する際に参考とする資料の種類について、図3に示した。

最も使用頻度の高い参考資料は伝承遊びに関連した専門書で、約63%を占めていた。ついで、過半数が幼児教育や保育関連の雑誌や新聞・テレビの情報を資料として利用していた。各種研修会や研究会などで配布された資料や報告書なども比較的多く使用されていたが、養成校等で使った教科書や資料の使用率は低かった。また、インターネットによる資料の利用率も低かった。

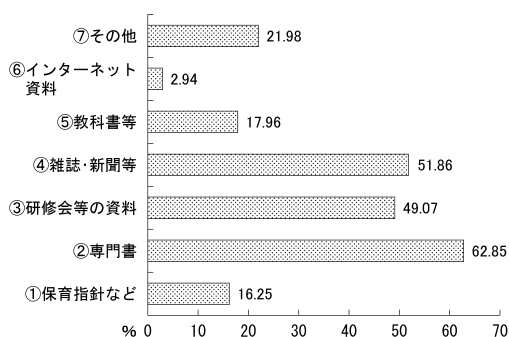


図3 伝承遊びの参考資料

4) 伝承遊びをカリキュラムの中で実施している時期について

伝承遊びを保育計画の中でどのように実施しているかについて図4に示した。約92%の園において日常的に伝承遊びを実施していた。約3%の園で、定期的にあるいは特定の日を定めて実施していた。したがって日本の保育所・幼稚園のほとんどの園では、日常的に伝承遊びを実施しているといえる。

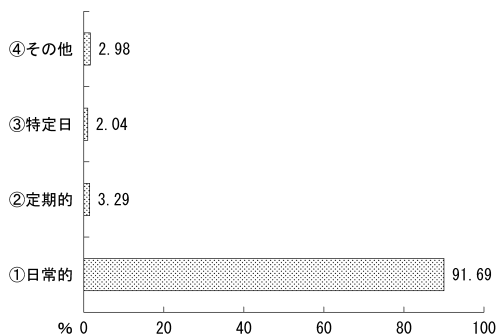


図4 カリキュラムで実施の時期

5) 伝承遊びをカリキュラムに導入する方法について (複数回答)

伝承遊びをどのような方法でカリキュラムに導入しているかを図5に示した。最も多いのは、日常的に遊ぶように教材や教具が使えるように準備をしている、が約84%であった。ついで、保育者が生活主題の中で伝承遊びを紹介する方法をとっている園が約50%であり、次いで伝承遊びと関連する行事を定期的に計画する園が約23%であった。

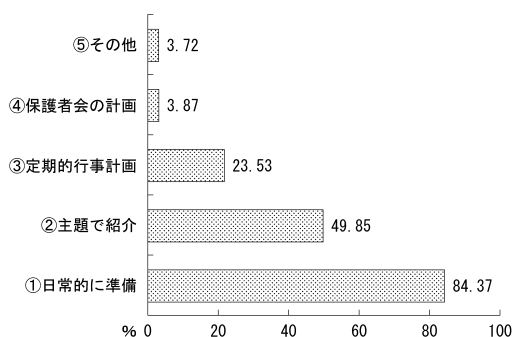


図5 カリキュラムへの導入方法

日本では、日常的に伝承遊びを実施するために、環境を常に準備している園が多いといえる。

6) 伝承遊びの指導法

伝承遊びの指導法について、その結果を図6に示した。伝承遊びの内容と方法を保育者が教えて、それを子ども達が実践できるようにする方法をとっていたのは約46%であった。その次に、保育者が伝承遊びの内容と方法を教え、その後、幼児達がそれを創造的に工夫して遊ぶように心がけている園が約27%であった。次に保育者が伝承遊びのできる道具や環境を準備し、子ども達が自由に遊べるように心がけている園が約21%であった。

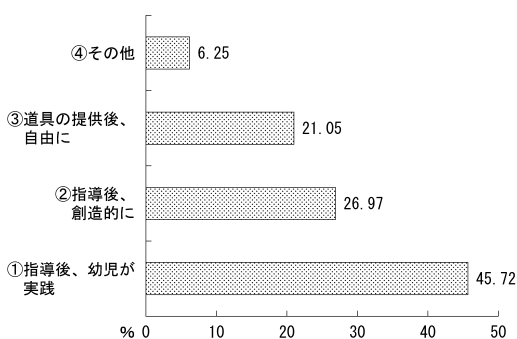


図6 伝承遊び指導法

日本では伝承遊びの性質上、まず内容や方法を保育者が教え、幼児はその楽しい遊びを日常的に実践するようにしていた。

7) 伝承遊び道具の準備方法（複数回答）

伝承遊びの道具の準備方法については図7に示した。最も多いのは既成の遊び道具を購入している園が約78%、ついで、保育者と幼児と一緒に製作し、それを使って遊ぶように心がけている園が約73%であった。また、保育者自身が製作している園は約55%であった。

日本では保育者が製作できるものは、幼児と一緒に製作しようとしているが、自分達で作れないものは既成の道具を購入していた。

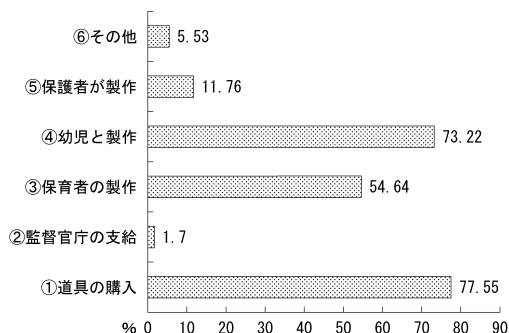


図7 伝承遊び用の道具の準備法

8) 伝承遊びに対する幼児の反応

伝承遊びに対する幼児の反応については図8に示した。非常に興味を持っていると回答した園は約74%であった。やや興味を持っているのは約26%であった。

日本においては、伝承遊びに対してほとんどの子どもが興味をもっているといえる。

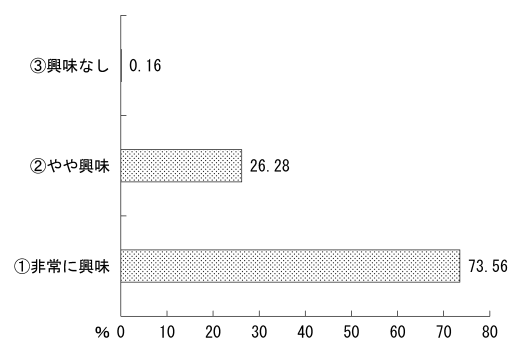


図8 子どもの反応

9) 伝承遊びを知った動機（複数回答）

伝承遊びを保育者が知ようになった動機について、図9に示した。

最も多いのは子どものころに遊んだ体験であり、全体の98%を占めていた。次に多いのは、職場の同僚から教わったものが61%、また、書籍や雑誌から学習したものが約58%であり、養成校で学んだと回答したものは16%であった。

日本の保育者が伝承遊びを習得する方法は、子どものころに遊んだ体験とそれに加えて、保育者となった後に、先輩や同僚から学習し、書籍や雑誌を通じて習得しているといえる。

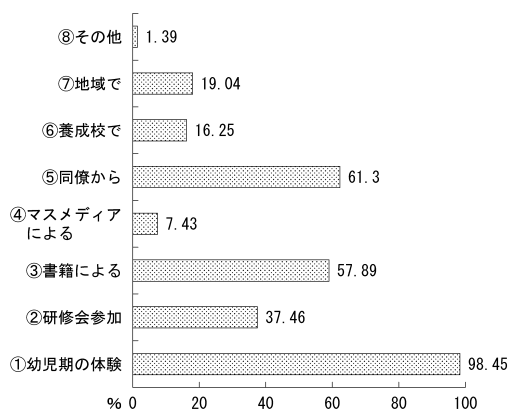


図9 伝承遊びを知った動機

10) 伝承遊びを保育に取り入れていない理由

(複数解答)

伝承遊びを保育の中に取り入れていない理由について、図10に示した。

伝承遊びを取り入れていないと回答した者は5名であり、全体から見れば1%弱である。

その中で、最も多いはその他で60%、ついで保育の中で関連させるのが難しいというものが40%であった。

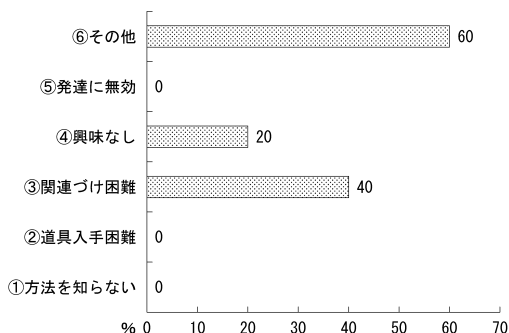


図10 保育に伝承遊びを取り入れない理由

3. 保育者の伝承遊びに関する意識

これ以後の質問事項は、保育者の伝承遊びに関する認識について問うたものである。

11) 伝承遊びに関する関心の程度

保育者の伝承遊びに対する関心度について、図11に示した。伝承遊びにとっても関心を持っている保育者は約64%、少し関心を持っている者は約36%であった。

日本の全ての保育者が伝承遊びに対して、程度の差はあるもののほぼ全員が関心を持っているといえよう。

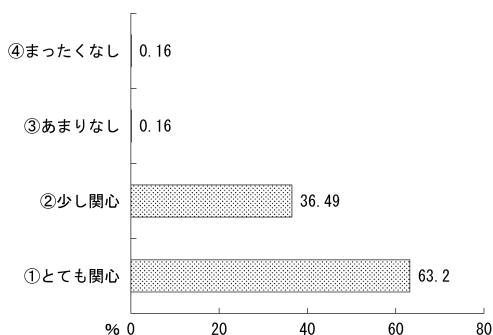


図11 伝承遊びへの関心程度

12) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む必要性

伝承遊びをカリキュラムに組み込む必要性について図12に示した。伝承遊びをカリキュラムに組み込むことが必要であると回答した保育者は約78%、やや必要である者は約21%であった。また、やや必要ない、必要ないと回答者は約1%の8名であった。

日本の保育者の約99%が、伝承遊びをカリキュラムの一環として組み込む必要であると考えているといえる。

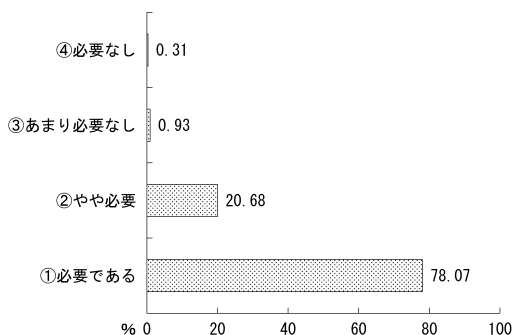


図12 伝承遊びのカリキュラムへの導入について

12-1) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む理由

(複数解答)

伝承遊びをカリキュラムの一環として組み込むことが必要な理由を、図12-1に示した。

最も大きな理由は、伝承遊びが幼児の成長や発達に有効であるが約84%であった。ついで日本固有の文化に関心を持って、それを継承するためにと考えているものは約78%であった。

日本の保育者は伝承遊びが幼児の成長や発達に有効な保育教材と考えていること、そして、伝承遊びが日本の幼児の遊び文化の継承に役立っていると考えているといえる。

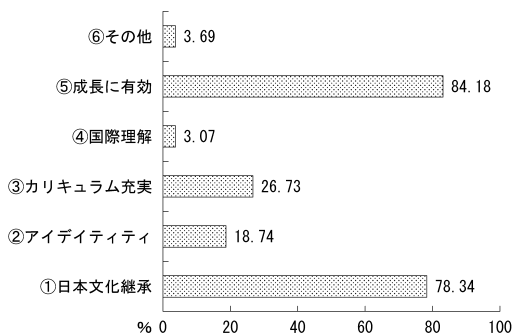


図12-1 カリキュラム導入の理由

12-2) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む時期

伝承遊びをカリキュラムに組み込む時期について、図12-2に示した。

保育者の約92%が日常的に組み込むことが必要であると考えていた。

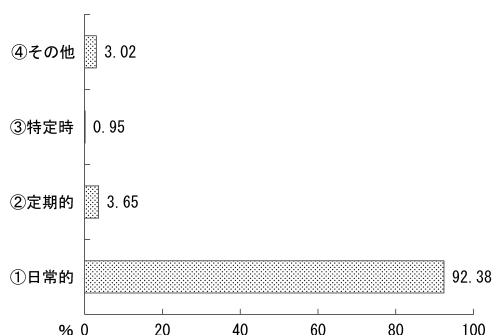


図12-2 カリキュラム導入時期

12-3) 伝承遊びのカリキュラムへの導入方法

伝承遊びをカリキュラムに導入する方法について図12-3に示した。

幼児たちが自由に遊べるように教材や教具を準備して実行するが約47%で最も多く、ついで保育者が生活主題の中で伝承遊びを紹介するが約35%であった。

日本の保育者は、幼児が伝承遊びを自主的に実施できるように環境を準備する必要性と、伝承遊びを生活主題の中でそれと関連した内容を幼児に伝える必要性があると考えていた。

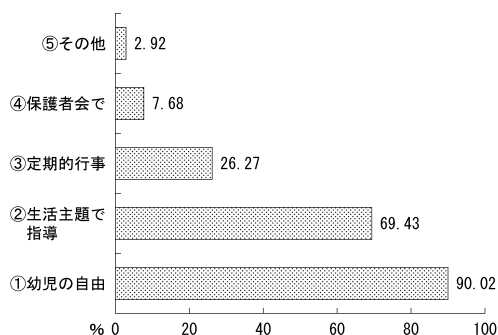


図12-3 カリキュラム導入の方法

12-4) 伝承遊びの指導法

伝承遊びの指導法について、図12-4に示した。

最も多いのは、幼児に伝承遊びの内容や方法を教え、それを基に幼児が創造的に遊べるようにしたいと考えている保育者が48%、ついで、保育者が伝承遊びの内容と方法を教えて、それでは実践すると回答した保育者は約31%であった。

日本の保育者は伝承遊びの内容と方法を教えた後、幼児がそれを活用して遊びを豊かに展開して欲しいと考えていた。

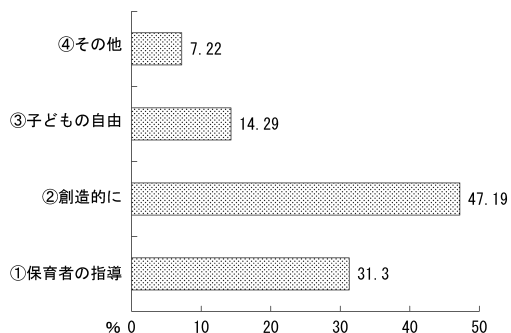


図12-4 幼児へ指導法

13) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む際の困難さ (複数回答)

伝承遊びをカリキュラムに適用する際に感じる困難さについて、図13に示した。

最も困難な問題としてあげられた項目は、保育者自身の伝承遊びに対する認識が不足しているが約58%であった。ついで、伝承遊びを幼児に理解させて伝達することの難しさが約24%であった。

日本の保育者は伝承遊びを日常的にカリキュラムに組み込みたいと思っているが、保育者自身は伝承遊びに関する知識が不足し、適切なカリキュラム構成が難しいことと、指導において幼児に分かりやすく指導することが難しいと考えていた。

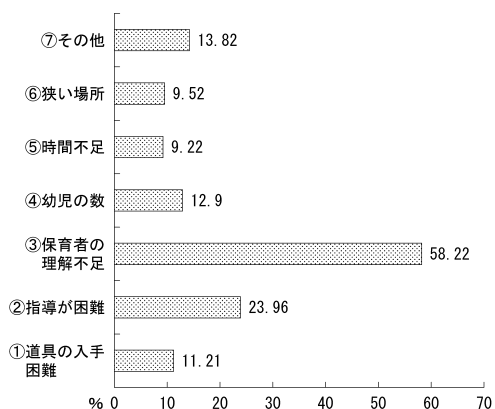


図13 伝承遊び導入の困難さの理由

14) 伝承遊びの普及する際の条件 (複数回答)

保育者が考えている、伝承遊びを活用し普及するために必要な条件を、図14に示した。

伝承遊びに関する研修の機会を増やすが約58%で最も多く、ついで家庭と連携して保護者が伝承遊びに関心を持つようにするが約38%であった。ついで養成校で学生に伝承遊びを十分に指導する必要があるは約32%であった。

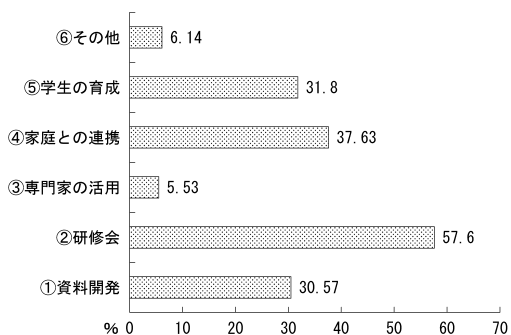


図14 伝承遊び普及方法

日本の保育者は、伝承遊びに関する認識不足を解消するために研修の機会を増やし、保育中に伝承遊びを普及することや、幼児が日常的に伝承遊びの体験を増やすために家庭との連携を求めている。

15) 伝承遊びをカリキュラムに組み込む必要がない理由

問12で伝承遊びをカリキュラムに組み込むことに対してやや必要ない、必要ないと回答した保育者8名の理由を図15に示した。

8名のうち75%はその他で、理由は明記されていない。他の2名の理由は保育者自身に関心がない、幼児の興味に合っていないと考えていた。

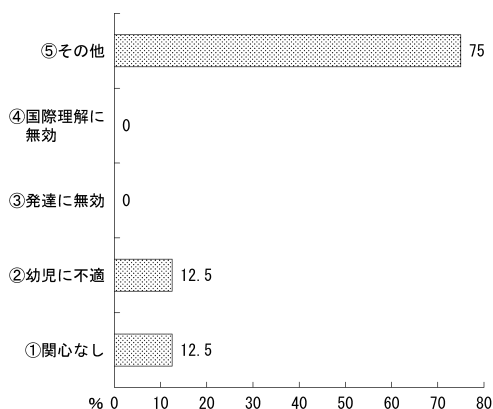


図15 伝承遊び不要の理由

4. 調査地域別分析結果

1) 伝承遊びの実施率地域比較

伝承遊びの実施状況を得点化して、地域の比較を行った。得点は各回答項目に対して実施3点、承知2点、不承知1点を与えた。満点は183点となる。回答園651園の平均点は154.5±0.5SDを平均群、+0.5SD以上、点数では160点以上を実施率上位群とし、-0.5SD以下、得点で149点以下を下位群とした。

その結果を図16に示した。これによれば、東海地域が伝承遊び実施園の比率が最も高く、次いで四国、北海道・東北の順であり、地域間に有意差が認められた。

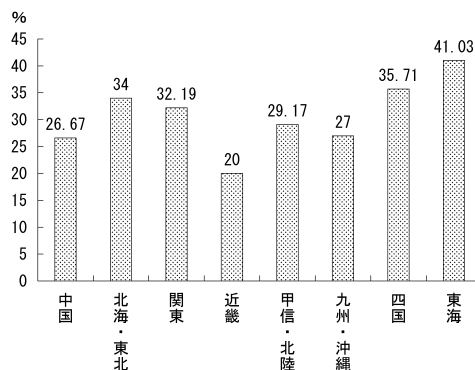


図16 伝承遊び高実施率の地域比較

2) 伝承遊びの地域比較

伝承遊びの実施状況で地域差が認められたものは表3に示した、また、最も伝承遊びの実施率が高い地域を網掛けで示した。北海道地域では「目かくし鬼」、「ケンケン相撲」、「雪投げ合戦」、「そり・スケート遊び」が最も高かった。東海地域では、「靴取り」、「渦巻きじゃんけ

ん」、「どろけい」、「田んぼの田」の遊びで高い実施率を示した。四国地域は「猫とねずみ」が、また、中国地域では「子とろ子とろ」の実施率が高かった。

伝承遊びの保育への導入やその方法など、さらに保育者の認識に関する項目については、顕著な地域差は認められなかった。

表3 地域差が認められた伝承遊び

伝承遊び名	北海道・東北地域	関東地域	甲信越・北陸地域	東海地域	近畿地域	四国地域	中国地域	九州・沖縄地域	全国の実施率	有意差検定結果
靴取り	9.18	15.32	8.70	28.21	16.46	11.90	8.47	10.00	13.68	**
子とろ子とろ	33.67	30.63	21.74	23.00	16.25	39.66	45.24	39.00	30.50	*
目かくし鬼	20.00	17.12	5.71	6.41	12.50	19.05	6.90	12.12	12.85	**
猫とねずみ	47.47	43.75	49.28	45.45	35.00	61.90	35.59	46.00	44.83	**
ケンケン相撲	48.98	29.73	23.19	25.97	20.51	33.33	31.03	26.00	30.17	**
渦巻きじゃんけん	64.00	64.86	62.86	92.31	79.75	73.81	81.36	76.77	73.67	**
どろけい	30.00	72.97	37.14	76.92	52.56	52.00	42.37	52.00	52.82	**
雪投げ合戦	99.00	64.86	97.18	67.95	51.65	38.10	79.66	53.54	70.33	**
田んぼの田	13.00	16.96	11.59	26.92	8.86	21.43	15.52	10.20	15.90	**
そり、スケート	94.00	24.11	74.65	23.08	25.97	14.29	44.07	5.05	39.03	**

5. 保育者の年齢による比較

1) 伝承遊び実施率の年代比較

伝承遊びの実施率が高い保育者の年代比較を、図17に示した。50歳代以上の伝承遊び実施比率が最も高く、20歳代の実施比率が最も低かった。年代間に有意な差が認められた。

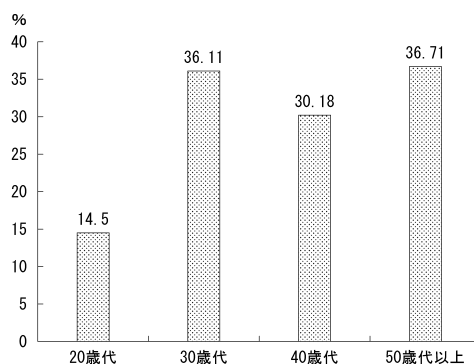


図17 伝承遊び高実施率の年代比較

2) 保育者の年齢と伝承遊び実施率

保育者の年齢と伝承遊びの実施状況を表4に示し、最も実施率が高い伝承遊び種目の年代を網掛けで示した。統計的に年代間の有意差が認められた伝承遊びは、15種目であった。その内、11種目は50歳代以上の保育者で、20歳代は2種目、30歳代は2種目であった。保育経験の長い保育者の伝承遊び実施率が高いことが明白であった。

表4 保育者の年齢と伝承遊び実施率

伝承遊び名	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全国の実施率	有意差検定結果 (χ^2)
靴取り	8.26	11.89	15.00	18.83	13.95	**
子とろ子とろ	16.53	22.92	37.00	38.16	30.25	**
目かくし鬼	4.13	8.33	13.96	21.57	12.66	**
猫とねずみ	34.17	45.45	41.89	58.06	45.16	**
Sケン	8.26	7.69	10.41	18.06	11.25	*
どんじゃんゲーム	56.20	56.94	62.73	64.94	60.72	**
ちゃんばらごっこ	61.93	68.75	52.94	54.19	58.50	**
ドロケイ	65.29	59.72	47.96	40.91	52.19	**
田んぼの田	13.22	15.98	15.07	11.61	14.89	**
石蹴り	4.13	10.42	13.51	17.65	12.03	**
地面の陣取り	1.65	2.11	4.09	13.73	5.50	**
砂取り遊び	72.73	72.22	63.51	53.25	64.74	*
そり・スケート	38.02	34.03	41.36	42.58	39.38	**
すごろく遊び	84.30	88.19	90.95	94.23	89.88	*
ぞうり隠し・靴隠し	9.09	16.67	16.29	23.23	16.69	**

3) 伝承遊び実施状況の年代比較

① 伝承遊び導入の動機の年代比較 (表5)

保育者の年代と伝承遊びの実施状況で年代間の有意差が認められた項目を、表5から表10に示した。個人的な動機によるものは40歳代が最も高い比率であり、20歳代と50歳代は園の方針に従う比率が高く年代間に差が認められた。

表5 伝承遊び導入の動機の年代比較

伝承遊び導入の動機	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全体の比率	有意差検定結果 (χ^2)
個人的な考えから	35.40	34.31	40.76	32.89	36.39	**
園の方針によって	57.52	43.80	50.24	56.38	5.64	

② 伝承遊びの参考資料 年代比較 (表6)

保育者が伝承遊びを実施する際に使用する参考資料で、年代間の有意差が認められたのは3項目であった。幼稚園教育要領や保育所保育指針を参考にするは、40歳代と50歳代で他の年代よりも高い比率であった。研修会の資料を参考とするものは、50歳代と20歳代が高比率であった。養成校の教科書などを資料とするものは、20歳代が最も高い比率を示した。

表6 伝承遊びの参考資料 年代比較

伝承遊び参考資料	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全体の比率	有意差検定結果 (χ^2)
教育要領・指針	10.83	11.97	20.27	19.23	16.41	*
研修会の資料等	52.50	46.48	43.24	57.69	49.22	*
養成校等の資料	30.83	21.83	14.41	8.97	17.81	**

③ 伝承遊び指導法の年代比較（表7）

保育者の年齢群と伝承遊び指導法については、各年代とも伝承遊びの内容や方法を幼児に教えて、それを幼児が実践するように指導していた。30歳代は内容や方法を教えるが、あとは、それを幼児が創造的に実践するように指導している比率が、年代間で最も高かった。

伝承遊びの道具を準備して、幼児が自由に遊べるようにしている比率は50歳代が最も多かった。

表7 伝承遊び指導法の年代比較

伝承遊び指導法	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全体の比率	有意差検定結果 (χ^2)
内容・方法を教え幼児が実践	44.74	43.38	45.67	48.61	45.68	*
内容・方法を教え幼児が創造的に実践	24.56	38.97	25.00	20.14	26.91	
環境を準備し、幼児が自由に	23.68	11.76	22.60	25.69	21.10	
その他	7.04	5.88	6.73	5.56	6.31	

④ 伝承遊びの道具調達方法の年代比較（表8）

伝承遊び指導に際して使用する道具類の調達方法で年代間の差が認められた項目は、保育者が幼児と一緒に製作して遊ぶとするものが、30歳代以上の年齢群の比率が高く、20歳代が最も低かった。

表8 伝承遊びの道具調達方法の年代比較

伝承遊び道具調達方	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全体の比率	有意差検定結果 (χ^2)
保育者と幼児が一緒に作る	61.67	76.76	75.68	74.36	72.97	*

⑤ 伝承遊びを知った方法の年代比較（表9）

保育者が伝承遊びを習得した法方で、年齢間の有意差が認められたのは、3項目であった。テレビやメディアによるものは30歳代が最も高い比率を示した。先輩や後輩から学んだものは、20歳代が最も高く、年代が上がるに従って、減少傾向であった。

地域で学んだものは、50歳代の比率が最も高かった。

表9 伝承遊びを知った方法の年代比較

伝承遊びを知った動機	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全体の比率	有意差検定結果 (χ^2)
TV・メディアから	6.67	14.79	4.50	5.13	7.34	**
先輩・同僚から	67.50	62.68	64.41	50.00	61.09	**
養成校で学んだ	32.50	18.31	11.26	7.69	15.94	**
地域で学んだ	13.33	19.01	15.32	28.21	18.91	**

⑥ 伝承遊びの必要な理由の年代比較（表10）

保育者が伝承遊びの必要な理由としてあげた項目で、有意差が認められた項目は2項目であった。日本の固有な文化に関心を持って、それを継承するためとしたものが40歳代で最も高く、20歳代で低かった。私たちの文化に対する誇りとアイデンティティを確立するためとするが、50歳代以上において最も高く、年代が下がるに従って比率が低下傾向にあった。

表10 伝承遊びの必要な理由の年代比較

伝承遊びの必要な理由	20歳代	30歳代	40歳代	50歳代以上	全体の比率	有意差検定結果 (χ^2)
日本の文化継承	73.55	74.31	84.68	76.58	78.29	*
アイデンティティ確立	12.40	12.50	19.82	27.22	18.60	**

3. 保育者が選んだ伝承遊びベスト30

保育者が、幼児に好まれていると思う伝承遊びの上位5種目を、自由記述してもらった。保育者があげた伝承遊びは154種目で、その内から上位30種目を表11に示した。

表11 保育者が選んだ伝承遊びベスト30

全国の保育者が選んだ子どもに人気のある伝承遊びベスト30								
順位	遊びの名前	度数	順位	遊びの名前	度数	順位	遊びの名前	度数
1位	追いかけ鬼	260名	11位	あぶくたった	115名	21位	人形ごっこ	29名
2位	縄跳び	257名	12位	あやとり	93名	22位	色鬼	24名
3位	ままごと	219名	13位	どろけい	85名	23位	長縄	17名
4位	花いちもんめ	217名	14位	竹馬	67名	24位	凧揚げ	16名
5位	折り紙	191名	15位	ハンカチ落とし	66名	25位	猫とねずみ	14名
6位	だるんさんが転んだ	166名	16位	しっぽ取り	66名	26位	高鬼	13名
7位	こま回し	160名	17位	カルタ	64名	27位	そり・スケート	12名
8位	かくれんぼ	155名	18位	かごめかごめ	63名	28位	なべなべ底抜け	12名
9位	渦巻きじゃんけん	133名	19位	氷鬼	45名	29位	相撲	12名
10位	虫取り	119名	20位	ちゃんばらごっこ	32名	30位	お手玉	11名

IV 考察

1. フェースシート部分について

アンケート調査に回答した保育所と幼稚園は、北海道から沖縄までに及び、ほぼ日本全域に及び、多段階抽出法によって配布し回収された。従って、本調査結果は日本全体の保育者の意識を反映していると言っても差し支えない。回答保育者の年齢構成は、40歳代以上が約60%を占めていた。これは伝承遊びを実施し易い5歳児クラスの担当者に記入を依頼したことによるものである。

2. 伝承遊び実施状況

1) 日本の調査項目にあげた伝承遊びの種目

日本の調査項目にあげた伝承遊びの種目は増田編（1989）、穂丸編（2003）、芸術教育研究所（1986）、大林（1998）、奥・ながた（1987）、石原・穂丸他（1989）ら、の文献から、筆者らが保育教材として有用と思われる伝承遊びを29種目を抽出した。伝承遊びの選択基準は、1. 身体活動を伴った遊び、2. 知的な遊び、3. 手遊び、4. 社会性の発達を促す遊び、5. 行事的な遊び、6. 自然環境での遊び等から構成した。

日本と韓国の共通の種目は、韓国側の共同研究者から示された遊びの中から共同で検討して32種を抽出した。

伝承遊びとして保育所や幼稚園で非常に高い確率で実施している遊びには、1. 身体発達を促す遊びとして、「縄跳び」、「だるまさんがころんだ」、「かくれんぼ」、「追いかけ鬼」、「こま回し」、「まりつき」、「尻尾取り」、「おしくらまんじゅう」、「相撲ごっこ」などがあげられた。2. 子どもの知的発達を促すと思われる遊びは、「折り紙」、「カルタとり」、「すごろく」遊びなどがあつた。3. 手遊びには、「あやとり」があげられた。4. 社会性の発達を促す遊びは、「ままごと」、「お人形さんごっこ」、「あぶくたつたにえたつた」があげられた。5. 行事的な遊びには、「もちつき」があげられた。6. 自然の環境の中での遊びには、「虫取り」があげられた。これら実施率の高い遊びは、保育者が保育・教育計画の段階で多様な発達の側面を考慮しながら伝承遊びをカリキュラムに組み込んでいるためであると解釈された。これは発達の視点として幼稚園教育要領や保育所保育指針に示されている「健康」、「人間関係」、「表現」、「環境」、「ことば」を考慮しながら選択した結果だといえる。

一方、筆者らが路地裏や野原で親しんで遊んだ1950年代のダイナミックな「Sケン」や、「靴取り」、「石蹴り」、「町内めぐり」、「缶けり」などの遊びは、ほとんど実施されていないことが判明した。

子どもの心身の発達を促すダイナミックな遊びは、蔓延しているTVゲームを凌駕するものであるが、先ず「ガキ大将役」の保育者にその遊びで文化を伝える必要性を再認識した。

2) 伝承遊びの保育実施状況について

全国の保育所・幼稚園のすべてにおいて、伝承遊びが保育教材として導入されていた。そして伝承遊びを実施する主体は園の方針によるものが過半数以上、個人的に導入していると回答したものが約36%であり、このことは保育者にとって伝承遊びの教材的価値が高いことを示していると解釈できる。また、伝承遊びに対する幼児の反応は「非常に興味を示す」、「やや興味を示す」、を含めるとほぼ100%であり、伝承遊びの面白さや楽しさが保育教材としてその価値を高めていることが理解できる。そして伝承遊びはほとんどの園で日常的に展開しようと工夫されていた。その際の指導法は、保育者が伝承遊びの内容や方法を指導し、それを子どもが実施する方法が取

られていた。

子どもの遊びを豊かにするには、多くの遊び手段を子どもに伝える必要がある。1950年代の遊びは身近な年上の遊びを見よう見真似で学習し、遊び手段を習得し、それを使って遊びを発展させたものである。現在ではこの「ガキ大将の役割」を保育者が担わなければならない時代であり、遊び伝承者として保育者の役割は大きい。

保育者が各種の伝承遊びを保育計画に組み込む際の参考資料は伝承遊びの専門書が最も多く、次いで新聞や雑誌、研修会の資料等で、インターネットによる情報収集は20%未満であった。日本における幼稚園や保育所におけるITの普及はまだ十分でないことも、活用が低い理由としてあげられる。今後、インターネットによってより詳しい情報が得られるように、IT関連の施設整備とその充実が必要である。

保育者が伝承遊びを知った理由で最も大きな要因は、保育者の子ども時代に遊んだ経験が90%を占めていた。次いで、先輩や同僚から習った者が約60%であった。伝承遊びを指導するためにその遊びの本質や楽しさを熟知していないと、本当の楽しさを子どもに伝えることはできない。保育者の遊びに対する認識と体験は、遊びを豊かにするために重要な要因といえる。特に若年保育者の伝承遊びの実施率が低く、伝承遊びの経験の少ない保育者は研修会などで習得することも重要である。

3. 保育者の伝承遊びに関する認識

幼稚園や保育所で伝承遊びの実施率が非常に高いことから、保育者の意識や関心も高いことは当然であり、調査結果では、「とても関心がある」、「少し関心がある」を含めると98%であった。したがって、カリキュラムに組み込む必要性も高い肯定率であった。不要と回答したものはわずか1%程度であった。

保育者が何のために伝承遊びを保育へ導入するのか、その理由についての質問には、①子どもの発達に有効であるからが約84%、②日本の遊び文化の伝承が約78%であり、この二つが主要な理由であった。日本の保育者は伝承遊びの実施理由として文化に対する誇りやアイデンティティの確立や国際化教育に役立つなどの認識はあまり高くないといえよう。

保育者は伝承遊びを保育に導入する際の困難理由中の最も大きな課題は、保育者が伝承遊びに対する知識が不足していると思っている者が約58%で、過半数を超えていた。年齢別に伝承遊びの実施状況を比較すると20歳代が最も実施率が低く、年長の保育者が若年保育者に対して危惧を持っていると解釈された。

今後、伝承遊びを保育教材として普及させていくための対策として、保育者の研修会を増加すること（約58%）、家庭と保育者の連携（約38%）、養成校で授業を通して指導する（約31%）など、現役の保育者の力量を高める対策と養成校で伝承遊びの授業を充実させる必要性が示された。

4. 地域と伝承遊びの関係

地域別の伝承遊び実施率得点で高い順は、東海地域、四国地域、北海道・東北地域、関東地域、甲信越地域、九州・沖縄地域、中国地域、近畿地域であった。地域差が生じている理由を遊びの実施率から検討する。

遊びの実施率で、統計的に明らかな地域差が認められた遊びは9種目であった。全国的に実施率が高い80%以上の遊びには地域差は見られなかった。地域差が認められたのは、気候や自然環境と関係する、「そりやスケート遊び」、「雪投げ合戦」などは北海道・北陸・甲信越地域に多く、当然ながら南部の地域に少なかった。北海道地域では「目かくし鬼」、「ケンケン相撲」の実施率が高かった。これは比較的室内で遊ぶ機会が多いためであろう。東海地域では、「靴取り」、「渦巻きじゃんけん」、「どろけい」、「田んぼの田」などの遊びで高い実施率を示した。これらの遊びは戦後、路地裏遊びとして子どもたちに人気のあった遊びであり、幼稚園や保育所で受け継がれて来たものと思われた。四国地区の「猫とねずみ」、中国地域の「子とろ子とろ」の実施率が高い理由は地域文化の特性が反映されているものかどうか検証を要する。

戦後の路地裏遊びが保育の中で継承されている地域ほど他の伝承遊も数多く行っている可能性が高い、これが地域の得点に影響を与えていると推察された。

5. 保育者の年代と伝承遊びの関係について

保育者の年代別の伝承遊び実施得点から20歳代の保育者が明らかに伝承遊び実施率が低いことが明らかとなった。また、年齢による差が認められた遊びは15種目であった。そのうち50歳代以上が11種目において実施率が高く、遊びに対する知識や方法論において、他の年代の保育者よりも経験が豊かであることを示していた。20歳代で実施率が高かったのは「ドロケイ」と「砂取り遊び」であった。これらの遊びは比較的ルールが単純で指導し易い種類の遊びと思われた。

伝承遊びの実施状況は、地域差よりも保育者の年代差によるものが大きく、伝承遊び導入の動機や参考資料の活用の仕方、指導法、伝承遊びの知識の習得にも保育者の年代差が認められた。このことは伝承遊びを保育計画で立案する段階で世代間の意思疎通が重要であることを意味している。今回の全国調査を通して、伝承遊びが保育教材として重要な位置づけがされていることを再認識することができた。

今後の課題として保育者の伝承遊びに関する知識や指導方法の充実を図ることと併せて、伝承遊びの教材的価値や指導の系統性など総合的な研究を深めていく必要があると考えられる。

V まとめ

結果と考察は以下のようにまとめられる。

1. 伝承遊びは、調査対象園の全ての幼稚園や保育所で保育・教育教材として導入されていて、保育者の伝承遊びに対する関心は非常に高かった。

2. 調査した伝承遊び61種目の内、80%以上の高率で実施されていたものは22種目におよび、保育計画立案時に保育内容五領域の発達の視点を勘案して遊びの種目が選択されていると解釈された。また、実施率20%以下の遊びには1950年代のダイナミックな動きを伴った遊びが多かった。
3. 伝承遊び導入の理由としては、①子どもの成長と発達に有効であること、②日本の遊び文化を継承することが主なものであった。
4. 伝承遊びを指導する際の隘路は保育者自身の伝承遊びに対する知識不足があげられた。対策として、保育者の研修の充実、家庭との連携、養成校での指導があげられた。
5. 伝承遊びの種目別実施率には保育者の年代による差が認められた。20歳代の実施率がそれ以上の年代と比較し有意に低かった。
6. 伝承遊びの種目別の実施率は地域差があり、自然環境にかかわる種目が影響を与えていた。

謝辞：本研究にあたりアンケート調査にご協力いただいた全国の幼稚園・保育所の方々に感謝いたします。また、日本と韓国の翻訳を手伝っていただいた日本福祉大学大学院の留学生、金 珉呈さんに厚く御礼を申し上げます。

なお、この全国調査は韓国・梨花女子大学校幼児教育学科 李基淑教授、厳正愛助教授、暁園大学校 児童学科 鄭美羅教授と共同研究で行われ、調査に必要な経費は韓国からの支援（韓国学術進行会基金）によって行われたものであることを付記し深謝いたします。

参考文献

- 穂丸武臣編著（2003）『幼児の心身を育てる遊び』圭文社、東京。
遠藤ケイ（1991）『子ども遊び大全』新宿書房、東京。
芸術教育研究所（1975）『伝承あそび12カ月』黎明書房、名古屋。
芸術教育研究所（1986）『伝承遊び辞典』黎明書房、名古屋。
韓 丘庸（2000）『朝鮮の子どもの遊び博物館』東方出版。
半澤敏郎（1980）『童遊文化史 第1巻』東京書籍、東京。
石原花子・穂丸武臣他（1989）「保育内容に関する総合的研究」『名古屋市立保育短期大学研究所研究紀要第26巻』
J. ホイジンガ（1963）高橋英夫訳『ホモルーデンス』中央公論社、東京。
かこさとし（1979）『日本の子どもの遊び（上）』青木書店、東京。
かこさとし（1980）『の本の子どもの遊び（下）』青木書店、東京。
笹間良彦（2005）『日本子どもの遊び大図鑑』遊子館、東京。
桂 広介（1976）『児童心理学全集 6 子どもの遊び』金子書房、東京。
守屋光雄（1990）『遊びの保育』新読書社、東京。
日本レクレーション協会監修、増田靖弘編（1989）『遊びの大辞典（実技編）』東京書籍株式会社、東京。
日本レクレーション協会監修、増田靖弘編（1989）『遊びの大辞典』東京書籍株式会社、東京。
小川清実（2001）『子どもに伝えたい伝承あそび 期限・魅力とその遊び方』萌文書林、東京。

- 奥成達・ながたはるみ (1987) 『遊び図鑑』福音館書店、東京.
大林太良 (1998) 『民族遊戯大辞典』大修館書店、東京.
R. カイヨワ (1970) 清水幾太郎、霧生和夫訳『遊びと人間』岩波書店、東京.
柴谷久雄 (1977) 『遊びによる人間形成』黎明書房、名古屋.
城丸章夫 (1981) 『幼児の遊びと仕事』草土文化、東京.
高橋たまき (1996) 『遊びの発達学』培風館、東京.
勅使千鶴 (1999) 『子どもの発達と遊びの指導』ひとなる書房、東京.